

「日本の国ほど立派な国を見たことはない」ザビエルの手紙から学ぶ

参考著書「情報歴2012年」竹内日祥より

キリスト教を初めて日本に伝えたのは、**フランシスコ・ザビエル**であることが知られています。

キリスト教を**布教**する為に世界中の国を訪問しました。

彼は1549年、東の端の日本で布教をするため、薩摩の守護大名であった島津貴久に謁見し、**布教の許可**を得ました。大変苦勞の多い布教活動でしたが、2年間あまり日本各地を訪問したと記録に記されています。

ザビエルが日本人の印象を本国に報告した手紙が現在も残っています。

その手紙に記されていた要点を述べますと、

第1に、日本人は信仰心が純粹であると記されています。

「これまでいろいろな国々を見てきたが、日本の国ほど**立派な国**を見たことはない」という印象を抱いた様子です。「この国にキリスト教を布教したいが、仏教が広まっているために苦戦を強いられるだろう。」という実感をもったようです。

第2に「日本人は貧乏を恥じない」ということが記されていました。

「日本の国民は、貧乏を恥ずかしいと思う人がいない。これほど**思想性の高い**国民は、簡単に育つものではない。いかなる方法で教育したのであろうか。」という疑問を抱いたようです。

第3に、日本人は名誉心が強いということを感じたようです。

「特に武士は**尊敬**されています。武士は名誉心が極めて強く、名誉は富みよりずっと大切なものとされている。」ということに驚いたようです。

江戸時代になると侍の教育は**藩校**を設置し、家老の息子から身分の低い足輕の息子まで、レベルの高い教育を実施していました。一般庶民であっても、寺子屋にて**熱心な教育**が行われていたのです。幕末にかけて全国に16000の寺子屋が存在していたとされています。この寺子屋の教科書は、読み書き算盤という実生活に必要な知識や技術の他に、**四書五経**などの儒学書、歴史書、古典を用いて教育がなされていました。貧しい子供や百姓の子供も、**積極的に**教育を受けさせたようです。農民は、教育に理解がなかったと考えられていますが事実は逆です。例え自分たちの生活が貧しくても、親は読み書き算盤を子供に学ばせたいと、強く願っていたようです。当時の識字率は、ロンドンで20%、パリで10%、江戸では70%以上という高い数字になっています。

ザビエルが驚いた理由を解明するためには、日本における**教育内容**に注目する必要があります。

それは江戸時代まで日本では、**思想教育**を実施していたという事実に他なりません。

この思想教育により、ザビエルに感銘を与えた日本人としての**価値観**が確立したのです。

ところが明治になってから、**能力教育一辺倒**に変わってしまいました。能力のあることに価値があり、思想性を無視する明治政府の要人たちが現れ、**教育方針**を変更したのです。

日本人らしい価値観や、伝統精神を子孫に残すことが軽視され、断絶されてしまいました。

明治政府を確立した人たちは、すべて立派な人たちと思われていますが、当時の日本国民は、**思想教育から能力教育へと**、国民に対する教育方針を変更したことから、政府に対して、この教育の変更が今後**弊害をもたらす**という実感を抱いていました。

元来、日本人は、思想的思考性を特徴とする国民であり、**思想**を学ぶことが**教育**であると確信していました。その歴史は、日本人の祖先である**縄文時代**まで遡ることができます。

縄文人たちは、未来の為に現在の自分たちが、どんな辛いことにも耐えられる価値観の持ち主だったということが明らかにされています。

残念ながら、日本においては、**戦後**も能力教育一辺倒で、思想教育は行われていません。そのために、**無責任**な人が増えて来ています。思想教育が行われていた以前の日本人は、世界の最高レベルの**知性を維持**していたという事実がありました。

これからの日本は、思想的に物事を考えられる国民に戻るということが重要です。

そうすれば、日本人は再び**世界から尊敬**され、受け容れられる国になることが出来るのです。